

徳川家茂の学問

——幕末維新期の時代状況との関連から——

久住 真也

はじめに

本稿は、一四代將軍徳川家茂の学問について考察し、幕末維新期の時代状況のなかでそれが持った歴史の意味を考えるものである。家茂は二一歳という若さで長州戦争の最中、大坂城で死去した人物だが、その將軍在職期、とりわけ政治の前面に立った文久二年（一八六二）から慶応二年（一八六六）に死去するまでの間は、幕府中心の政治秩序が崩壊しつつあった時期である。家茂は歴史の中では、続く最後の將軍慶喜とともに、最も多忙な將軍であったと言えるだろう。

筆者はかねてより、家茂の学問に関する史料を通覧す

るなかで、度重なる上洛や外交・長州問題に忙殺される状況下で、武芸上覧や軍事訓練と共に、家茂の学問への取り組みが加速度的に強まっていくことに、少なからぬ関心をいだいてきた。果たして、人は自らが属す組織の存立基盤が揺らぐなか、また敵対勢力を前に学問に取り組むことができるのだろうか、また、その際の学問が持つ意味とは一体何なのか、という疑問である。それは、家茂が將軍として、国政を担当する立場にあった人物だけに、幕末維新期の時代状況を考えるうえでも、重要な問いだと考える。

ところで、歴代將軍と学問の関係については、優れた研究がすでにある。例えば、初代家康の学問や文教政策

から、その治者としての特質を明らかにした尾藤正英氏の研究⁽¹⁾、五代綱吉の儒学への没頭と、生類憐みの令に代表される施政との関連を明らかにした塚本学氏の研究⁽²⁾、八代吉宗の伝記的研究において、文教政策を論じた辻達也氏の研究⁽³⁾などがある。対して家茂については、短命だったこともあり、本格的な伝記や研究自体が著しく少なく、⁽⁴⁾当然ながらその学問についても、注目されることすら稀である。

しかし、その一方で学問関係については、まとまった史料が存在する。中心となるのは一貫して家茂の側近くに仕えた小姓頭取野村貫三郎による「小姓頭取野村丹後守筆記」(以下「野村筆記」と略記)や、同じく野村による『昭徳公事蹟』、幕末から明治期にかけて幕府と徳川家で編纂された『統徳川実紀』中の「昭徳院殿御在坂日次記」などである。これらはいずれも側近の記録、あるいはそれをもとにしたもので信頼性が高い。

また、家茂の学問は、武芸上覧や軍事訓練など「武」の側面を合わせて考察する必要があるが、論点の拡散を防ぐために、今回は学問に限定したい。そして、以下で

は自己修養という狭い意味の学問のみならず、臣下への学問奨励や政策としての学問にも注目しつつ考察を行っていきたい。

一、政治改革と君徳輔導

1、將軍就任直後の状況

家茂は紀州藩主の身から、安政五年(一八五八)一月に数えて二三歳で將軍となった。前述の「野村筆記」から、將軍であつた時期の学問状況をまとめると表のようになる。おそらく、ここに現れない書物にも触れた可能性はあるが、大凡の傾向は見てとれる。一覧すると、テキストとしては漢籍が多く、その内訳は儒学書(四書五経)と史書に二分される。そして後半になると史書の比重が高まり、そのなかでも国史(日本史)の比重が高まるのが見てとれる。

これを別の時代と比較しよう。例えば近世初期の大名の講書を検証した藤井讓治氏の研究によれば、漢籍より和書が圧倒的に多く、中でも軍記物が多いこと、漢籍で

表 「野村筆記」に見える学問記録

	儒学書	将軍家	歴史	国史	兵書
安政6年	小学、四書、詩・書経	徳川実紀・附録	貞観政要		
万延元年	四書	国朝大業広記			
文久元年	四書、詩・書経				
文久2年	論語、孟子、詩・書経				
文久3年	孟子(講、輪・聞)		史記(会・聞)	国史略(会・聞)	
元治元年	孟子(講、輪・聞)		貞観政要(会・聞)	日本外史(会・聞)	
慶応元年	劉向新序(輪・聞)		十八史略(会・聞)	日本外史(会、会・聞)	
慶応2年	四書、詩・書・易経		資治通鑑綱目(素)	日本外史(会)	要兵録、孫子

註 御小姓頭取野村丹後守筆記(『南紀徳川史』三)より作成。書名のあとの括弧内は学習方法を示し、(素)は素読(講)は講釈、(会)は会説、(輪)は輪講を示し、特に何も記していない場合は講釈を示す。また、(会・聞)や(輪・聞)の表記は、側近による会説や輪講を家茂が聴聞したことを表す。

は『史記』『漢書』などの歴史書に費やした時間が多いとされている。つまり、漢籍重視への転換が家茂の学問では起こっているわけだが、それは一八世紀以降の幕府や藩による学問所整備と朱子学の重視という一般的傾向が反映した結果と考えられ、幕臣教育に用いられたカリキュラムが頂点の将軍にも適用されたことを示している。¹⁾ また、史書の重視という点は藤井氏の研究とも共通

だが、後述するように、国史関係の比重の高まりは、近世後期の一般的傾向である。つまり、将軍のテキストは、『徳川実紀』やその『附録』などを別にすれば、当時の武家階級にとって一般的な傾向を示している。また、表からも分かるように、後半になると、会説や輪講という、複数の人間がテキストを読み合う討論型学習法が増えているのも、当時の一般的な段階的学習法に従ったものである。²⁾ 次に家茂の教授陣について見る。³⁾ 将軍の教育では、定

日に江戸城「奥」の御座之間で行われる林大学頭（安政六年の一二月に林復齋から学齋に代わる）の講釈、さらに、日々休息の間での奥儒者の進講が中心となる。後者では、紀州時代から家茂に仕えた小林栄太郎がもつとも長く務めており（慶応元年）、將軍就任時から務めた者では、奥儒者として成島家三代目の成島柳北（甲子太郎）がいる（文久三年八まで）。他には、柳北のあとを受けた元紀州藩儒の菊池三溪（角右衛門）（治元年六月）、^①小林の死去をうけた依田克之丞、保田鉦太郎の二人がいる。その他、侍講職などについては、追々触れていく。

「野村筆記」によれば、將軍就任直後、安政六年七月二七日に、定日に行われる『論語』と『貞観政要』の講釈に加え、「栄太郎当日ニハ是迄之通御附録」、さらに、閑暇のおりは、側向の者に『実紀』と『附録』の読み聞かせを命じたとあるので、將軍就任早々、將軍家茂とそれを支える側近への教育として、『徳川実紀』と歴代の言行録である『附録』が、いわば「帝王学」のテキストとして重視されたのである。^②

この安政六年半ばという時期に、將軍としての帝王学教授が重視されたのは、それなりの理由があった。この時期、家茂の最大の庇護者は大老井伊直弼であったが、一橋派という敵対勢力を弾圧して家茂の將軍繼承を実現させた直弼らは、一橋派に付け入る隙を与えないために、家茂の教育に力を注ごうとした。安政六年三月頃には、その家茂の教育が大きな課題になっていた。

例えば、井伊派のある下級幕吏は、直弼周辺に対する書翰で、家茂の我が儘が増長し、学問や劍術稽古はそつちのけで馬に夢中になり、庭内に厩ができるとの風説があると嘆息している。そのため奥向に側用人を置き、井伊大老と力を合わせ、家茂を「御見事成日本第一之大松」に育てることを熱望していた。^③それ以外にも、家茂の振る舞いや言動、奥向役人の輔導姿勢への批判は多く見られる。

この結果、沼津藩主水野忠寛が側用人に就任（三月九日）し、井伊直弼と連携して聖域であった奥向改革と將軍輔導のてこ入れが図られたが、年が変わった安政七年三月三日、周知の桜田門外の変により直弼が倒れたた

め、効果の程は定かでない。ただ、「野村筆記」によると直弼の死後、翌文久元年までの間（家茂は一五〜一六歳）、江戸城西九（本丸焼失中）・本丸の白書院下段に家茂が出御し、複数の儒者や儒者見習、学問所教授方出役（諸役と儒者の兼任）による経書の進講がしばしば見られるのは目を引く。「表」の儀礼・政務の空間である白書院（御三家や勅使との対面がなされる）で、一度に四〜五人の儒者が交替でテキストを代えつつ講釈するといふ学問スタイルが通常とは思われないが、このような形式が導入された経緯や、家茂の輔導との関係は今のところ判然としない。

2、文久改革期の変化

家茂の身边における学問環境が大きく変化するのは、文久二年五月に始まる幕府の文久改革からである。改革では大規模な制度改革とともに、学制改革がなされた。すなわち、学問所を統括していた林家のうえに、新たに学問所奉行（譜代大名が二人）が置かれ、学問所の教授陣が強化されるなど、土風復古を標榜する改革を、精神

面から支えるための教育が重視された。¹⁷しかし、従来の研究では、それが当該期の政治や、將軍の学問環境及び輔導態勢にどのような影響を与えたかについては、全く盲点となっている。筆者は、この時期の政治の特徴を知ろうえでも、これらの点は重要であると考ええる。

文久改革では、朝廷の要求と薩摩藩の圧力によつて、前越前藩主の松平春嶽が政事総裁職に、一橋慶喜が將軍後見職として幕閣入りした。特に春嶽は、朝廷尊崇と諸大名との協調を柱とした挙国一致路線へと幕政を転換させる役割を果たし、將軍家茂の政治姿勢にも影響を及ぼした。¹⁸

春嶽が幕政に参画した文久二年五月以降の幕政で特徴的なのは、学者重視の人事とでもいうものである。例えば、唐津藩世子の身分ながら、文久二年七月に奏者番となり、同年八月に若年寄、九月に老中格へと破格の昇進を遂げた小笠原長行や、同年十一月に高鍋藩主弟（のち世子）という部屋住み身分から学問所奉行に就任し、翌年九月に若年寄格兼將軍侍講となった秋月種樹などがある。この両者は、秋月とともに学問所奉行となった駿河

田中藩主の本多正訥と共に、かつて「三賢公子」と称された人物たちであった。⁽¹⁹⁾

また、文久二年一二月に、陪臣の身から昌平坂学問所の儒者に拔擢された塩谷宕陰（山形藩主で老中水野忠精家臣）、安井息軒（歿肥藩主伊東祐相の家臣）、芳野金陵（前掲本多正訥家臣）らは、いずれも自藩の文教政策に関わると共に、私塾を持つ天下に名を知られた儒者たちであった。例えば、安井の三計塾には、長州藩や土佐藩士を始め、幕末の藩政や維新期の国政で活躍する人々が集っていた。⁽²⁰⁾

注意すべきは、これらの人々は所属藩や階層の違いを超え、学問を媒介に広くつながっていたことである。例えば小笠原は部屋住み時代に安井と塩谷と交友があり、その安井・塩谷両人は昌平坂学問所出身の親友であった。⁽²¹⁾ また、小笠原の幕府への登用には、当時水野老中の家臣であった塩谷と、同じく老中の備中松山藩主板倉勝静の家臣で陽明学者の山田方谷が、彼らの主人である両老中に働きかけた結果だといふ。⁽²²⁾

小笠原の登用については、松平春嶽も幕閣の一員とし

てその決定に加わっており、⁽²³⁾ 以後、密接な関係を築いている。また、秋月の学問所奉行への登用、塩谷・安井・芳野ら三者の御儒者登用は、小笠原の建議によるものと小笠原の伝記は記している。⁽²⁴⁾ しかし、春嶽の記録によれば、塩谷の御儒者への登用は、実際に発令された文久二年一二月より前に、安井息軒の將軍へのお目見の件とセットで、同年七月一七日に幕議で決定していたようである。⁽²⁵⁾ つまり、これは小笠原の登用が決した翌日であって、秋月の件はともかく、塩谷以下三者の登用を小笠原の影響とするには無理があるだろう。

塩谷らの御儒者登用が、実際は一二月にずれこんだのは、例えば塩谷の登用が内決した二日後の七月一九日に、林大学頭より老中に対して、同人の登用については学問所儒者との調整を要するとの上申があったことや、⁽²⁶⁾ 安井などが、当時春嶽らが目指した参勤交代制度緩和政策に批判的であったという点も関係するかもしれない。⁽²⁷⁾ このように三者の登用が宙に浮くなか、その間に老中格にまで昇進した小笠原が、三者の登用を主張した可能性は考えられよう。

ほかにも芳野金陵が春嶽の政事総裁職就任（七月九日）直後、春嶽に上書（内容不明）を提出したり、側近の中根雪江を通じて意見具申を行っていたのを見ると、藩や身分の垣根を超えた天下の学問の人材が、春嶽の政事総裁職就任を契機に幕府に取り込まれる状況になったと考えられる。近世後期の儒学が政治に与えた影響は近年指摘されるが、そのような状況は、文久改革期の人事にも象徴的に現れたと言えるだろう。

また、その人事は、実際の政治にも影響を及ぼした点も注意したい。すなわち、登用された小笠原は、幕府儀礼を司る奏者番廃止の建議を行ったり（直後に廃止）、故井伊直弼以下、井伊政権に関わった幕吏の処罰と、將軍家茂による朝廷と天下万民への謝罪を建議し、結果的に実現している。また、春嶽の政治顧問であった横井小楠が、幕府の改革派と連携しつつ、幕政改革を実現させていった点は、先行研究で説かれている。²¹⁾

このような改革は、家茂の学問環境にも反映した。例えば文久二年一月二六日には、幕府の御儒者に抜擢されたばかりの塩谷が、家茂に対して御座之間において

『中庸』を、同じく芳野が『論語』を進講している。²²⁾ さらに、同年八月に一橋慶喜が松平春嶽に対し、横井小楠を「奥詰」という名目で將軍御前に常時祇候させ、政治に参加させるといふ幕閣の案を伝えていたが、これは実現しなかった。²³⁾

また、儒者ではないが、好学の人物として知られた前肥前藩主の鍋島閑叟（直正）が、文久三年正月七日に登城した際、將軍家茂の文武修行の相談役を命じられた。閑叟の自伝によれば、同人は老中と同じく坂下門より登城することを許され、正月一二日には、春嶽とともに家茂に召された際に『孟子』の一節を進講して政治の要諦を説き、將軍が朝廷尊崇の態度を示すことで、諸大名の將軍への尊敬を得ることができると教諭した。また、春嶽は『論語』学而の章から学問修養の着実たるべきことを説いたという。²⁴⁾

春嶽は、別の機会にも家茂に対して神祖家康の言葉を援用し、改革と政治の心構えを説いたり、熊沢蕃山の『集議和書』勧めたりと、²⁵⁾ 家茂への帝王学教育に熱心であった。それから考えれば、天下の名声のある人々を家

茂に接触させる機会を設けたのも、春嶽であった可能性は高い。春嶽は、天下の人材を挙げて將軍を感化しようとしたのであろう。

一方、以上のことは、本来幕府の文教政策を司る林家（林大学頭）の地位低下を必ずしも意味するわけではなかった。春嶽は政事総裁職就任の直後、七月一日に江戸城内で後見職の一橋慶喜とともに、御側御用取次の大久保忠寛ら呼び、家茂の輔導と奥向改革について議論しているが、その日の春嶽の政務記録には、「林大学頭より御小納戸人選之事」とあり、將軍側近の人事に大学頭が関与しているのが見いだせる。また、七月以降、大学頭とその一族で西丸留守居・学問所御用である林図書頭（のち式部少輔・鶯溪）の両林家による、定日の御座之間での進講が定められ、さらに、九月二日には、以後兩人が休息之間で講釈を行うことが命じられている。これは、家茂の私的空間で学問が高い比重を持ちつつあることを示していた。

この時期に松平春嶽が幕政に提起したのは、朝廷尊崇と諸大名との協調、突き詰めれば「公議」重視の政治で

あるが、それは、広く天下の人材を集める意図ともつながっている。それは、將軍の輔導態勢や、家茂身辺の学問環境にも表れているのである。

二 家茂による学問振興策

1、二条城の臨時学問所

文久二年五月二二日、將軍家茂は簡易制度と質直の士風への復古を標榜した幕政改革の上意を發したが、その前日には、これまで愛玩していた鳥類を無益なものとして、奥向と吹上の庭にあった鳥籠をほとんど撤去した。側近らはいまだ若年である家茂の慰めがなくなるとして憂慮したが、家茂は側近に文武を奨励することが慰めになるとして、「夫ヨリ一際文武之御世話被遊」というのが、「野村筆記」が記すところである。その言葉通り、家茂による側近（小姓・小納戸・書院番など）を始めとする臣下への学問奨励は、文久改革以後「野村筆記」に類出するようになる。ここでは、奥儒者菊池三溪（文久三年八月に就任）が語る家茂の学問への姿勢を、福井辰

彦氏の研究に拠って検討したい。

福井氏によれば、菊池は元治元（一八六四）年六月に小十人頭へと左遷されたのち、七月から致仕する九月までの間に、転役の命に反発して老中格松前崇広に上書を提出している。以下、氏の論文から一部をそのまま引用させてもらい、検討したい（原文は漢文であるが、福井氏の読み下しに依拠しつつ、一部筆者が手を加え、さらにルビを付した。傍線①～③は筆者による）。

（前略）將軍英明、能く文武一途にして偏廢すべからざるを洞知し、大いに学院を内廷に開く。身親ら之に臨み、鼓舞率先、日び經史を討論す。是に於いて内外百僚、絃誦風と為り、武人俗吏と雖も、咸読書講文を知る。窃かに以謂く、国家右文の化、坐して致すべしと。既にして大駕西上し、再び京師に入観するに、純（菊池のこと）も亦辱くも扈從の末班に廁る。其の二条城に在るや、將軍發憤し、斯学を講明す。春より夏に至るまで、凡そ一百余日の間、機務を以て其の業を廢せず。駿駿平として其の学大いに進めり。諸侯往往書籍を獻じ、以て其

の業を佐くる者、歩武相接す。豈曠代の盛事と謂はざるを得んや。（括弧内は筆者、以下同じ）

すなわち、家茂の学問振興の熱意が幕臣や諸大名をも感化していく様が述べられ、歴代に類のないものと称揚したものである。右の傍線部①～③に注目してもらいたい。①家茂が「内廷」すなわち、江戸城の奥向に学問所を設け、自らその場に足を運び、臣下と経書や史書の討議に及んだ結果、諸臣の間で学問が大いに興ったこと、②家茂が京都滞在中に二条城で学問振興に努めたこと、③それに対して諸大名が書籍を献上してその業を助けたこと、である。ちなみに、ここで言う上洛とは、菊池の就任時期から見て、家茂にとって二度目の元治元年の上洛である。以下、①～③に即して詳しく考察する。

まず、①は家茂の事蹟でも特筆されるところで、「野村筆記」には、家茂は奥向に学問所を設けて「養賢閣」と名付け、奥儒者をして側近たちに教授させ、上達者には定日のテキストの輪講を命じ、度々聴聞したとある。この「養賢閣」が設けられた時期はあとで考証するが、家茂が直轄する側近の学問所が城内に設けられたという

点に注目しておく。

次に②の部分、すなわち元治元年の上洛中の学問奨励についてであるが、その前提として、初度の上洛（文久三年三月）での滞京と帰府後の注目すべき動向を見ておきたい。將軍としては二二九年ぶりとなった初度の上洛は、約三ヶ月の長期滞在となった。家茂が二条城滞在中の四月六日には、供の番方・部屋住・厄介・御目見以下の者まで、志ある者は日々二条城の「二百畳之間」にて輪読・会読を行い、学問に励むように触れている。これ（註）に関する記録は以後見えないが、大規模な学問奨励のおそらく最初であろう。

そして、江戸帰府後の文久三年八月二日には、江戸城本丸の、当時御前会議を行った黒書院に近い山吹之間に家茂が出御し、表儒者のほか三人（人名は不明）によるテキストの輪講を聴聞した。以後、この山吹之間において、毎月一日に『孟子』の輪講、六の日は『史記』の会読と定められ、番方など表役人の出席が命じられ、布衣以上の役人には聴聞が命じられた。そして、四日後の八月六日には、山吹之間に隣接する羽目之間に家茂が出

御し、山吹之間での諸役人による『史記』会読を聴聞している。つまり、二条城での表役人への学問奨励に続き、江戸城でも表の諸役人への大規模な学問奨励が見られた。以後、同様の形式による会読・輪講の聴聞がしばしば行われたようである。（註）

しかし、同年一月一五日の江戸城本丸焼失により、この学問奨励策は中断した。家茂は田安御門内の田安屋敷に居を移し、京都での八月一日政変後の状況に対応すべく、一二月二八日には二度目の上洛のため海路品川を出発した。この元治元年の上洛（二月に文久四年から改元）は、前年の上洛よりも長期間の滞在となったが、右に見た江戸城本丸の山吹之間での大規模な学問奨励が、そのまま二条城で再現されたのが、菊池が先に上書で述べた傍線②の部分にあたるのである。以下では菊池の言を裏付けていく。

「野村筆記」によれば、二条城では（ア）二月一七日に、月の二・七の日は会読、四・九の日は輪講と定められ、小姓や小納戸など將軍側近は当番・非番にかかわらず出席すること、素読はこれまで通り日々行うよう命じ

られた。会読と輪講の定日には、上洛に随従した学問所奉行の秋月種樹と林大学頭が出席することとされた。(イ)月に西三度つつ詩文会を行うとし、題目は家茂から直接与えられることもあるとされた。そして、(ウ)二月一九日より、表方の諸役による『孟子』の輪講と、岩垣松苗『国史略』の会読が「表二百畳之間」で始まった。これも時折家茂が聴聞するとされ、三月一〇日には、家茂が同所で京都常住の諸役人による講釈を聞いている。⁽⁵⁾

まず(ア)だが、ここでは学問所奉行や林大学頭が出席することで重みを加えており、さらに、「野村筆記」には「但御用閑之節ハ 出御被遊、御会読・御輪講被遊候事」とあるように、家茂もテキストを読み合う会読や輪講に参加するとされた点は注目される。(ウ)に対しては、「折々 思召ヲ以御菓子等被下候事」とあるように、家茂が積極的に臣下を鼓舞している様子が伺われる。ちなみに、(ア)と(イ)が行われた場所は、奥向役人が対象になっていることから考えて、奥向のどこかであろう。対して、(ウ)の表方役人による輪講と会読

が行われた「表二百畳之間」とはどこであろうか。前述のように、この場所は、初度の上洛に際して表役人の学問振興で用いられた場所(「二百畳之間」)でもある。

幕末期の二条城二丸御殿(当時は本丸はなし)の空間をよく知り得るものとして、幕府の奏者番をつとめた伊勢長島藩主増山正修の日記と付属絵図の写しがある。⁽⁶⁾これによれば、二百畳クラスだと儀礼空間である大広間のほかに、同所の南(玄関口の左手)に仮廊下で本殿につながる二〇畳敷の仮建物描かれており、ここが「二百畳間」と考えられる。この建物は現在跡形もないが、文久・元治二度の上洛に随従した老中水野忠精の日記にも「二百畳之間」の記述が頻出し、城内に宿直した際の寝所、着替え場所としても使用されているのが分かる。⁽⁷⁾この場所で、御前での剣鎗術試合も行われたので、一種の多目的講堂として、学問振興にも用いられたのである。

また、菊池が述べた傍線③の部分。すなわち、諸大名からの書籍献上は、管見の限りでは、家茂滞京中の元治元年三月二三日、阿波藩主蜂須賀斉裕より『資治通鑑

綱目』全巻、京都守護職の松平容保から四書五経そのほか三部献上という記録がある。⁽³⁹⁾後者の松平容保の献上については、家茂から度々容保へ品物の下賜があり、その返礼を用意すべく、同藩士が御側御用取次に問い合わせた結果、「御本丸炎上之節御書物共焼失ニ有之、此節御読書之御差支も有之候間、四書五経杯可然哉、且刀劍類も御好被成候ニ付、是等も可然哉」との答えによったもので、家茂を満足させている。⁽⁴⁰⁾周囲には家茂が好学の將軍であるとの評が存在したことが分かる。

家茂の二度にわたる上洛は、いずれも長期にわたったため、学問奨励策は、武芸上覧と共に、随従幕臣の士気の緩みや、遊惰な状況を引き締める目的があつたと思われる。⁽⁴¹⁾それにしても、居所が京都↓江戸↓京都とめまぐるしく変化するなかで、家茂の学問振興の熱意は途切れることなく継続し、規模が拡大しているのは注目できるだろう。ただ、菊池が述べた傍線①と②は時系列的に見ると逆である。それは、以下に見るように、「内廷」において学問が活発化するのには、むしろこの二度目の上洛以後だからである。

2、反改革路線と学問環境の変化

この二度目の上洛から家茂が帰府した元治元年五月二〇日以後、幕府内部は朝廷から命じられた横浜鎖港政策の是非をめぐり激しい対立に見舞われた。そして、続く七月の京都での長州藩兵の武装上洛による禁門の変、それを受けた第一次長州出兵（一〇月―十二月）へと政局が展開し、次第に攘夷勢力による幕府への圧力が弱まるなか、江戸では朝廷と諸大名との協調を忌避し、幕府権威復活を目指す開国派の幕閣が登場した。これは、文久改革に対する反改革路線であり、松平春嶽（初度の將軍上洛直後に無断帰国により逼塞処分）らと協調した改革派の排除が、翌年半ば頃まで続くことになる。⁽⁴²⁾

この反改革路線は、改革の精神的部分を担った学問分野にも影響を及ぼした。すなわち、將軍帰府直後の五月二八日には、秋月種樹が内願により学問所奉行を辞し、さらに七月には奥向での侍講職も免じられた。そして、同年十一月には学問所奉行職自体が廃止された。秋月が松平春嶽に送った翌元治二年正月の書翰によれば、秋月

だけでなく、林大学頭もこのような状況への不満から、前年一二月より病氣を理由に引き籠もったという。⁽³³⁾

秋月は、同じく春嶽への元治二年三月の書翰で、「大抵読書人は皆抱不平申候」とし、「文運之盛衰実二天下之安危」に関わると危機感を表明した。⁽³⁴⁾先に奥儒者菊池三溪の上書を福井氏の研究に拠りつつ紹介したが、同人が辞任する背景には、右に述べたような改革派排除という政治動向があったのは間違いない。先の上書には、この時期の状況について、將軍の帰府後、「権姦」「群小俗吏」によって、將軍の左右に仕える忠義心ある善良な学問関係者は退けられ、自らと志を同じくする者は左遷されたり、閑職に追いやられたと直裁に述べている。⁽³⁵⁾

また、江戸の会津藩士は、元治元年一二月の上層部への報告書に、改革派が排除される幕府内について、「殆ど秦世晋末之気色有之」としつつ、次のように述べる。

是迄林家にて奥え伺公講釈・論講等被仰付、御上にて御一同御講談も被遊候義を近頃被相廢、祭酒公（林大学頭）も大ニ失望之御直話も有之、其他有志之者共御撰之上、御（小）納戸・御小性等被仰付

種々之御話申上、専ら下情被知召候様板倉公・御側土岐公力を戮セ御取計被成候義をも、此節ハ右等之人々皆々擯斥ニ至・⁽³⁶⁾

つまり、文久二年の改革以来行われていた大学頭による休息の間での進講や、家茂が臣下と行った輪講が近頃は廃止され、失望していると大学頭より話があった。また、老中板倉勝静や土岐朝昌（御用取次）が、有志の者を小納戸や小姓に選抜し、家茂に下情を知らしめようとしたが、板倉や土岐らは退けられたというものである。これは、先に秋月が報じた大学頭が不満で引き籠もったという情報と、符合するものだろう。

以上より、奥儒者の菊池も含め、この時期家茂に近侍し、君主教育に熱心だった人々が改革派に連なる者として排除されたと見て間違いない。

先の秋月は元治二年二月の春嶽への書翰で、將軍家茂はいまだ若年で見識も立たないので、公武一和や開国を行うには春嶽が文武の指導を第一に、家茂に見識を持たせるような輔佐が必要だと述べている。そして、輔佐に人を得れば、家茂は「御明質」なので、必ず「中興之英

主」になるとしている。⁽⁵⁵⁾つまり、文武向上と輔佐の存在は、家茂の成長を支える車の両輪であった。以後、家茂が改革派的な輔佐を欠くなか、いかに学問に取り組んだかが問題となるだろう。

3、養賢閣の設置

家茂は帰府後、江戸城の本丸・西丸両所が焼失中のため、田安御殿に滞在していたが、七月朔日に西丸に建てられた仮御殿に移った。まさに、秋月が奥向御用を罷免される直前であり、反改革路線が展開される時期である。「野村筆記」では、その翌月より家茂の学問関係の記事が見え始める。定日の林家による御座之間での講釈のほか、八月二十七日には、休息之間において、学問所奉行兼若年寄格の土岐頼之（文久三年一月就任）と林式部少輔（西丸留守居・学問所御用）、奥儒者の小林栄太郎・小姓・小納戸らが、家茂と頼山陽の『日本外史』の会読を行い、以後これは定例となる。そして、九月九日には、一・三・八の日は、六つ時から五つ時まで二つのグループに分かれ、『貞観政要』と『劉向新序』をテキ

ストに夜会（おそらく前者が会読、後者が輪講）が始まり、家茂が聴聞することになった。⁽⁵⁶⁾

翌元治二年（四月に慶応に改元）になると、三月に入り「野村筆記」に初めて、「養賢閣」の名称が登場する。管見の限り、これ以前にこの名称は他の史料にも見えず、三月六日の記事に「是迄於溜、栄太郎御次講釈有之候処、以来養賢閣ニテ致シ候様被 仰付候」とあり、月に四日の日割りが定められ、時々家茂が聴聞に訪れるとされた。また、長州再征の子告令という重大な発令がなされた四月朔日、「九半時過ヨリ於養賢閣、小林栄太郎始学問奥詰之面々改テ講釈被 仰付 御聴聞被遊候」とあり、家茂が養賢閣に臨み進講を受けたことが分かる。ここでいう「学問掛奥詰」は五人であり、小林とともに報償の品を下賜されている。⁽⁵⁷⁾

野村による『昭徳公事蹟』附録は、養賢閣設置にいたる経緯を次のように記す。

文久四亥年（三年の誤り） 御本丸炎上後 西丸へ
仮御殿出来ニ相成候ニ付テハ、当節文武格別御世話
モ在ラセラレ候事故、下楽屋辺御稽古場ニ被 仰付

候テ屢々臨御有之、文武共ニ厚ク御世話有之候、其後文事ニハ御不都合ノ御場所故、学問ノ方ハ御控座敷ノ方へ引セラレ養賢閣ト相唱へ、是亦度々臨御有之候、

つまり、養賢閣は家茂が西丸仮御殿に移って以降設けられたもので、当初は文武奨励のために「下楽屋辺」で行っていたが、学問稽古のみ「御控座敷」に移り、同所を「養賢閣」と名付けたという。「御控座敷」とは、奥向の將軍の対面所である御座之間と、中庭と廊下を挟んで向いに位置する御三卿の登城時の控部屋と推測される。この時期、御三卿の一橋慶喜は禁裏守衛総督・摂海防禦指揮として長期滞京中で、清水家は当主が置かれず、田安家の当主龜之助は幼少であったので、実質空き部屋だったのだろう。

つまり、反改革路線の登場以後、それ以前に見られた、林大学頭による休息之間での進講や、江戸城本丸の山吹之間、二条城の二百畳之間で展開された表方役人への大規模な学問奨励は見られなくなった。しかし、家茂の私的空間では、將軍直轄の学問所が誕生するなど、依

然学問熱は継続したと見てとれる。

この養賢閣の発案は、家茂自身によるものかどうか分からず、また存在期間は、後述のように決して長くはなかったが、残存する蔵書数から見ても家茂の事蹟を語るに際して特筆されるものとなった。その設置が反改革路線の最中であつたことは、注目できる。

三、大坂滞陣中の学問

1、学問所機能の大坂移転

慶応元年四月に発令された長州再征令は、家茂自ら出陣したこともあり、移動に伴う三度目の学問環境の変化をもたらしした（五月一六日江戸出発、閏五月二二日に入城）。翌年七月に死去するまで家茂の大坂滞在は一年以上に及び、その間、武芸上覧や軍事訓練とともに、学問にも引き続き熱心に取り組んだ。

「野村筆記」六月二五日の条によれば、長州問題の長期化に伴い、家茂は劍槍道具と書籍を軍艦で江戸から取り寄せている。そして、七月朔日には「今日ヨリ日々御

座之間於溜々、御側向学問稽古相始り候事」とあり、二と九の日は『日本外史』、五と一〇の日は『十八史略』がテキストと定められ、奥儒者の小林栄太郎が教授にあたると共に、家茂も政務の合間に聴聞するとされた。また、同年一月二〇日の記録に「四時比ヨリ学問所へ被為入」という記述が見えるように、御座之間の近辺に江戸城西丸御殿と同様に「学問所」が設けられたのが分かる。つまり、書籍と共に養賢閣の機能も大坂に移動したと見てよい。

さらに、慶応二年二月、長州藩との開戦の可能性が高まるなか、御座之間下段に陣羽織姿の家茂が出御して、それに接する「次之間」で臣下に四書五経を中心とした講釈を命じたり、自ら題を与えての詩作を命じている。その際に講釈と詩作を命じられた対象は、小姓などの側近だけでなく、広く番方（新番、大番など）のほか、関東郡代組頭、講武所砲術方修行人、徒目付といった身分の低い人々にも及んでいる。場所も当初の御座之間から、「表」の連歌之間（白書院の一画）へ移動するなど、反改革路線以前に見られた表方の学問振興策を想起させ

る措置がなされている。

加えて、「野村筆記」の慶応二年三月七日の条には「毎朝御素読済二・七二日本外史江戸表之通御会説被遊候、但毎朝御素読之節ハ御儒者林式部少輔・奥ハ儒者鉦太郎代ル代ル御相手ニ罷出候、御会説之節ハ多分兩人共罷出候事以後略ス」とある。つまり、いつの時点からか不明だが、毎朝の素読に加え、江戸のときと同様、定日の『日本外史』会説が行われたことが分かる。素読の際は御儒者の林式部少輔と保田鉦太郎（小林栄太郎に代わり慶応元年九月より就任）が交替で相手となり、会説の際にも兩人は参加したという。ちなみに素読テキストは、「資治通鑑綱目」である。

ここで、会説・輪講という学習形式が持つ意味について改めて検討しておきたい。近年の会説についての詳細な研究である前田勉『江戸の読書会』によれば、会説や輪講とは、ひとつのテキストを複数の人間が読み合うもので、籤で決まった順番に従い一人一人テキストを講義し、他が疑問を出して討論するものである。その場合、テキストを読むことを主とする会説と、内容を「講ずる

会説」(輪説)の二つがあった。また、討論においては、会頭(塾の師匠や先進生)が議論の優劣を判定した。このような学習法は、昌平坂学問所や藩校、私塾で広く行われたが、参加者の対等性が原則とされ、激しい討論を時に伴い、身分に関わらない能力差を浮き彫りにしたという。⁽⁸⁸⁾

また、この会説・輪講は、幕末期には藩主レベルにまで浸透したことも明らかにされている。同じく前田氏は、佐賀藩や水戸藩において、藩主と藩士が場を共にして会説を行った事実注目しているが、石川謙氏も、幕末の松江藩主松平定安の事例を検討し、近世後期には御前講釈を聴く消極的な学習法から、藩主が自らテキストを読み解釈する会説・輪講などの積極的なものへと変化したと指摘している。⁽⁸⁹⁾松平定安は家茂と同時代の藩主であり、安政の慶応期という本稿の対象時期と重なる点も注目できる。しかし、管見の限り將軍の会説について考察した研究は見当たらない。

問題は、將軍家茂が臣下とともに、このような討論型学習に臨んだことが持つ意味である。この学習法の目的

として、前田氏は、討論を通じて「虚心」を身につけること、つまり自己抑制しつつ相手の話を聞き、広い視野から判断する官僚精神を養うことにあつたとし、例えば、水戸藩主の徳川斉昭が、藩内で言路洞開を行ったことに関連して、斉昭自身が会説によって、他者の意見を聞く「虚心」の精神を身につけていたとする。⁽⁹⁰⁾

一方、石川氏は、藩主が単に治者としての徳を修得するだけでなく、一般藩士と同様の討論型学習法により、理解力と応用力を高めることが、藩の隆盛に結果すると考えられたと述べるとともに、幕藩制秩序の動揺が、このような学習法を藩主クラスの人々(世子も含む)に要請したとする。⁽⁹¹⁾ただ、なぜそのような時勢が、会説や輪講を要求するのか、説明は十分ではない。

一体、家茂は会説に何を期していたのだろうか。家茂が実際に側近と激しい討論を行ったのかどうか分らないが、本稿で引用した史料などを見ても、実際に臣下とテキストを読み合ったのは事実と思われる。そこで、前田氏が重視する、会説が持つ対等性という点に注目すると、例えば五代將軍綱吉が、諸大名に対して一方的に自

らの講釈を聴かせたのとは大きな違いと言わねばならぬ。そこには、臣下と対等の目線で学問する將軍か、それとも臣下とは隔絶した高みにあるのを前提に、「恩典」として講釈を聴かせる將軍かという、將軍をめぐる、相異なる二つの型が見いだせるように思われる。この幕末期に、前者のような「將軍の型」が現れるのは、家茂の個性に帰せられない、普遍的な要因が存在するのではないだろうか。

2、將軍にとつての『日本外史』

今度は、会読で家茂が用いたテキストに注目したい。家茂が重視したテキストとして、頼山陽の『日本外史』がある。同書は文政一年（一八二八）に成立、天保七年（一八三六）～八年に初版が刊行され、近世の藩校や明治期の学校の教科書として、岩垣松苗の『国史略』（文政九年刊）などと共に広く読まれたものである。³³⁾

家茂の大坂滞陣中、慶応元年七月～翌年四月まで、側近や老中、大名から書籍が多数献上されたことが「昭徳院殿御在坂日次記」より分かるが、そのうち『日本外

史』は二回献上されている。ひとつは慶応元年七月一日に小姓松浦與次郎と溝口徳之助兩人によるもので、もうひとつが翌年二月二十六日の過書船支配人の内山五郎助なる人物による献上である。前者の小姓兩人は約二ヶ月後に目付に転じるが、「御在坂日次記」によれば、両者の『日本外史』献上は家茂の思召にかなひ、物を下賜されている。³⁴⁾一方、後者の内山がいかなる由緒によつて書物を献上するにいたつたか分からないが、それ以前に『孝経』と『通鑑肇要』を献上しており、小姓兩人より半年ほど遅れて「薄様摺」の『日本外史』一部を献上している。³⁵⁾

これらの事例を見ると、『日本外史』は家茂が重んじたテキストであつたと考えられる。小姓兩人は、江戸で家茂と同書の会読に参加していた可能性があり、大坂で同書を献上したのはそれなりの意味があろう。例えば、野村による『昭徳公事蹟』附録には、在坂中の家茂の会読について、次のようにある。

月五六度ハ御側廻リノ者御相手ニテ日本外史御定日ノ御会読有之、又御用暇ニハ不時二歴史等ノ御会読

遊ハサレ、御引立遊ハシ候程、一同有難ク勵合候ヒキ、

ここから、家茂と側近が、戦時の大坂で『日本外史』や史書の会読に熱心に取り組んでいる様子が彷彿としてくる。内山も何らかの手段で家茂が『日本外史』を好んでいるとの情報を得たのだと推測される。

家茂と『日本外史』の関係については、前田愛『成島柳北』が触れるところがある。前田氏は、『大奥秘記』の記述をもとに、柳北が家茂への進講テキストとして『日本外史』を用いたとして、これを柳北の旧慣にとらわれない闊達さを示すものとしている。⁽¹⁰⁾家茂が同書に初めて接したのが柳北の進講によるものか分らないが、実際の学問関係の記録に同書が表れるのは、柳北の罷免以後である。

それはともかく、問題は、前田氏が柳北による『日本外史』進講を、旧慣にとらわれない云々と述べた点にある。それは、将軍が『日本外史』を読むことが特殊だという捉え方が前提にあるわけだが、それは妥当なのだろうか。

すでに見てきた家茂の学問方法は、基本的に昌平坂学問所や藩校、私塾で広く用いられたものであり、テキストも同様の傾向がある。『日本外史』は、一般に吉田松陰のような尊攘派志士が読み、倒幕思想やその行動に影響を与えたと言われるが、それは一面的な見方である。例えば、尾藤正英氏が、『日本外史』は「勤王」「尊王」を武士にとって至上の道徳的義務と見做すところに特徴があるとしつつも、それが幕藩体制の否定や、天皇親政への願望を意味するのではなく、むしろ「勤王」の功績ある新田氏の末裔を称した徳川家の政權掌握を正当化している点と見るのは、注目される。⁽¹¹⁾『日本外史』が幕府政治を否定する書物だという見方は、明治期の誤読によるものである。⁽¹²⁾

つまり、家茂の『日本外史』会読は、決して特異な現象とは言えない。むしろ問題は、より積極的な意味をそこから見いだせるかどうかである。すなわち、武士階級一般に広く読まれたとしても、将軍という地位にある人物がそれを重んじたことの意味は問う必要がある。

家茂の政權担当期は、将軍に対する天皇からの「大政

委任」という考え方がゆらぎ始め、その危機に対処するため、政治の前面に立つて行動することを強いられた。実際に、家茂は二度の上洛を行うことで、「尊王」を實踐したと解釈できる。大政委任を確実にするうえで、「尊王」を「行動」でもって示すことは、幕末の将軍に欠かせないものであった。⁽²⁾つまり、家茂が『日本外史』を重視するのは自己否定ではなく、むしろ肯定であったといえよう。「勤王」や「尊王」は、後世言われるような、水戸徳川家出身の徳川慶喜の専売特許ではないのである。

つまり、身分・階層や立場の相違を超えて、「勤王」「尊王」の実践的価値が共有されるようになったことを、家茂の『日本外史』会説は象徴しているとも言える。いわば「尊王」実践の普遍化である。長州藩を「朝敵」とし、天皇の勅命を得て「官軍」としての征討軍を率いる家茂にとつて、同書は現実的意味を持ったはずである。ところで、『日本外史』にはもう一つの側面がある。同書を含む近世後期の国史による歴史教育について大久保利謙氏は、歴史の大勢を把握し、その得失を論じさせ

ることで歴史から教訓をくみ取り、施政の参考に供する点にあると述べているが、この点は重要な示唆を与えるだろう。⁽³⁾

例えば、『明治天皇紀』を紐解くと、「勤王」の対象とされた明治天皇が、幕府倒壊後、中国の歴史書などと共に、『日本外史』の素読を明治四年（一八七二）六月から同八年一二月にかけて行っているのが知れる。当時侍講であった元田永孚は、『日本外史』の効用について、「努テ王覇ノ更替、治乱沿革ノ理勢ヲ論談シテ 聖智ノ發達ヲ求ム」と述べており、天皇の治者として必要な、歴史教育に主眼が置かれていたのである。

果たして、家茂が『日本外史』をどのように読んだか分からないが、明治期の天皇と同様、国政の手綱を裁く立場にあった家茂が、施政の糧として、『日本外史』に学ぼうとしたことは考えられよう。その必要性は、秩序が動揺しつつある戦時だからこそ、一層切実に感じられたのではないだろうか。

慶応二年六月八日に長州藩と開戦して以後、家茂は体調を悪化させ、七月に入ると病（脚氣衝心）は重篤化し

た(二〇日死去)。「野村筆記」には、同年三月七日を最後に学問関係の記事を欠く。したがって、日々の素読と「日本外史」の会読もいつまで続いたのか、史料からは分からない。

おわりに

長く小姓頭取を務めた野村貫三郎は、「昭徳公事蹟」附録において、家茂が在坂中、内政と外交の切迫や、諸藩の向背、不利な戦況などによって心労を重ね、慰労の機会もないなか江戸と異なる風土のなかで心臓の病を發したと記している。家茂の遺品には書があるのみである。尾張徳川家の当主であった故徳川義宣氏は、家茂の書について、字は未だ幼さの残る筆跡であり、器用さや巧みさは窺えないとしつつも、次のように述べている。

しかし、家茂の書に感じられるほどの気魄を、他の歴代將軍の書に感じとることは出来ない。それはもはや平和の世の教養の一端や稽古ごと、手すさびごとではなく、自らの祈り、決意を筆に籠めて発露さ

せた結晶でもあると見える。書の本当の素晴らしさは技術でも教養学問でもないことを、家茂の書を見るたびにつくづくと考へさせられる。家茂に絵画遺作があるとはまだ耳にしたことも目にしたこともない。おそらくないだらうと思つてゐる。⁽²⁰⁾

この評価は、家茂の学問への取り組みを史料から垣間見た筆者には、よく理解できるように思われる。若年であつた家茂の学問への理解度がどの程度だつたかは分からない。しかし、仮にそれが十分でなかつたとしても、学問の高度な理解と奥義への接近が、必ずしも現実と切り結ぶことを約束するわけではない。理解の程度が十分でなくとも、それを糧に現実を理解しようという態度はありえると思う。切迫する戦争の前に、学問に取り組んだ將軍の姿は、それを示しているのではないだろうか。我々は、このような家茂の能動的な学問への取り組みから何を見い出すことができるのだろうか。それは、突き詰めれば、幕末維新の変革期にあつた君主層(天皇、將軍、大名など)の行動様式との関連である。

前述のように、泰平の時代と異なり、自らが政治の前

面にたつて行動することを求められた將軍のあり方は、周囲の人々との関係性を含めながら、全体的に能動的なものへと変化した。本稿で見たように、家茂が極めて自分の低い幕臣と講釈を媒介に直接向き合い、会読では側近たちと対等性の空間に身を置いたように、学問の分野でも、隔絶した高みにある將軍のポジションは変化したと言える。

このような学問を介した臣下との関係は、政治的にはどのように表現されるであろうか。幕末期には、幕府や諸藩、朝廷で御前会議が一般化し、君主が自ら臣下の議論を聞き、裁断を下すことが求められた。そこでの会読を主催する君主の立ち位置は、会読での討論を裁定する会頭の役割とも通じるものがある。また、先の前田氏は、会読を対等性のほか、参加者の相互コミュニケーション性を育むものとして捉えているが、家茂は、臣下から直接意見を聴取する「御人私御用」を多様し、中間に人を介さない政治的コミュニケーションを重視したことも指摘しておきたい。⁽³⁾

それに関連し、元紀州藩士で『南紀徳川史』を編纂し

た堀内信は、家茂が未だ若年にも関わらず「数百年來固執したる上下大懸隔の障壁」を断然打破して「君臣親密の途」を開き、士気を収攬したことは、歴代に類を見ないと評価している。⁽⁴⁾つまり、同時代にあって、君主が臣下と共に政治や学問の場に臨み、つねに前面に立つことが、ひいては組織全体の求心力と士気を高める効用があると考えられたのである。ここに、政治と学問双方のスタイルは重なり合うことになる。

將軍家茂の学問は、幕末維新期における君主のあり方や、政治の状況と密接に関わって展開されたのである。

註

- (1) 尾藤正英『江戸時代とはなにか』(岩波書店、一九九二年)。
- (2) 塚本学『人物叢書 徳川綱吉』(吉川弘文館、一九九八年)。
- (3) 辻達也『人物叢書 徳川吉宗』(吉川弘文館、一九八五年)。

- (4) 家茂については、展示図録であるが『徳川家茂とその時代―若き將軍の生涯―』（徳川記念財団、二〇〇七年）が詳しく、研究では拙著『幕末の將軍』（講談社選書メチエ、二〇〇九年）、拙稿「政治君主としての徳川家茂」（明治維新史学会編『明治維新史論集1 幕末維新の政治と人物』有志舎、二〇一六年）などがある。
- (5) 唯一の例外として、前掲『徳川家茂とその時代』がコラムで家茂の奥向教育改革について論じており、本稿で扱う家茂が設けた学問所である養賢閣についても触れている。
- (6) 堀内信編『南紀徳川史』三（南紀徳川史刊行会、一九三一年）所収。
- (7) 野村静山『昭徳公事蹟』全九巻・附録（国立公文書館デジタルアーカイブで公開）。
- (8) 『統徳川実紀』四（吉川弘文館、一九八二年）所収。本記録では「野村筆記」も使用されている。
- (9) 筆記を残した野村は、紀州藩より家茂に従い幕臣となり、小姓、小姓頭取介をへて文久二年二月に小姓頭取となり、家茂の死去後の慶応二年一〇月に致仕した。
- (10) 藤井讓治「近世前期の大名と侍講」〔同〕『近世史小論集』思文閣出版、二〇一二年、三六八頁。
- (11) 近世後期の学問と幕政の関係については、真壁仁『徳川後期の学問と政治』（名古屋大学出版会、二〇〇七年）参照。
- (12) 前田勉『江戸の読書会』（平凡社選書、二〇一二年）第一章。
- (13) 教授陣の就任時期、履歴については『大日本近世史料柳宮補任』五（東京大学出版会、一九八三年復刻）、真壁前掲書の三五頁以下にある「付表7-1」を参照した。
- (14) 『柳宮補任』では、「菊地」と記載するが、福井辰彦「ある儒者の幕末―菊池三溪伝小攷」（『論究日本文学』89、二〇〇八年）に従った。
- (15) 『附録』は歴代將軍の言行録と逸話からなるが、家茂の場合、幕府創業者である初代家康はもちろんだが、同じく紀州出身の八代吉宗に関する『附録』は重要なテキストだったのでないだろうか。
- (16) 『大日本維新史料 類纂之部 井伊家史料』一八（東京大学出版会、一九九三年）、二〇三頁。
- (17) 学制改革の沿革については、倉沢剛『幕末教育史の研究』一（吉川弘文館、一九八三年）による。
- (18) この点については、註4拙稿「政治君主としての徳川家茂」参照。
- (19) 『小笠原老岐守長行』（一九四三年・一九八四年復刻、土筆社）、一六頁。

(20) 友田昌宏『東北の幕末維新』（吉川弘文館、二〇一八年）、七五～七六頁。

(21) これらの人々の経歴は、『明治維新人名辞典』（吉川弘文館、一九八一年）による。

(22) 『小笠原老岐守長行』、一二〇頁。また、近年小笠原が登用される背景として、儒者ネットワークの存在を重視した研究に、奈良勝司「小笠原長行と「公議」」（『立命館大学人文科学研究所紀要』二〇一五年二月号）がある。

(23) 『御政事総裁録』（『松平春嶽全集』四、原書房、一九七三年所収）、一〇二頁。

(24) 『小笠原老岐守長行』、一〇八～一〇九頁。

(25) 『御政事総裁録』、一〇三～一〇四頁。安井の御目見は『続徳川実紀』四には見えないが、若山甲蔵『安井息軒先生』（一九一三年、蔵六書房）が抄録する安井の書翰（二六四頁）には、九月二五日に御目見が実現したとある。

(26) 『御政事総裁録』、一〇七頁。

(27) 『安井息軒先生』一六五頁以下の安井書翰参照。このなかで、安井はこの件で幕府の役人による讒言がなされたという伝聞に言及している。また、この年九月の風説には、安井と塩谷、芳野らが参勤改革に反対する密議を行っているところある（『官武通紀』一、東京大学出版会、一九七六年、三二頁）。

(28) 『御政事総裁録』、九八頁。『続再夢紀事』一（東京大学出版会、一九八八年）、七一～七二頁。

(29) 朴薫「幕末政治変革と（儒教的政治文化）」（『明治維新史研究』八、二〇一二年）。

(30) 『小笠原老岐守長行』、一〇二～一〇九、一二七～一三九頁。

(31) 高木不二「横井小楠と松平春嶽」（吉川弘文館、二〇〇五年）、八六～九四頁。

(32) 『続徳川実紀』四、四八八頁。

(33) 『続再夢紀事』一、一～二頁。

(34) 中野礼四郎編『鍋島直正公伝』五（侯爵鍋島家編纂所、一九二〇年）、二四九～二五二頁。進講日時は『続再夢紀事』一、三四七～三四八頁による。

(35) 『御政事総裁録』、一三〇頁。

(36) 『再夢紀事・丁卯日記』（東京大学出版会、一九八八年）、一四九頁。

(37) 『御政事総裁録』、九八頁。

(38) 以上『野村筆記』、二二七～二二九頁。

(39) 同右、二二六頁。

(40) 福井前掲「ある儒者の幕末―菊池三溪伝小攷」。

(41) 同右、八頁。

(42) 『野村筆記』、二八一頁。

- (43) 「昭徳院殿御上洛日次記」(『続徳川実紀』四、五八一〜五八二頁)。
八二頁。
- (44) 以上「野村筆記」、二二二〜二二三頁。
- (45) 同右、二二八〜二二九頁。
- (46) 二条城において、江戸城の御座之間に相当するのは白書院であるが、当時は現在見られない建物や部屋が存在した可能性がある。
- (47) 国立国会図書館古典籍資料室蔵「御上洛御供日記」(一五五〜一八五)。これは、増山の日記を後任の高遠藩主内藤頼直が職務遂行のために筆記したものとされる。
- (48) 大口勇次郎監修『水野忠精幕末老中日記』六(ゆまに書房、一九九九年)、一七三、一九二頁。同書七の二二、二四頁など。
- (49) 註(7)「昭徳公事蹟」四。
- (50) 『会津藩庁記録』四(東京大学出版会、一九八二年)、三三〇〜三三二頁。四書五経以外は『四書輯疏』のほか、『皇朝二十四孝』(谷保先代の谷敬撰)などの道徳的なものである。
- (51) 初度の上洛の際も、奥向役人の江戸への帰心が改革派から問題視されていた(拙著『長州戦争と徳川将軍』、岩田書院、二〇〇五年、六二頁)。
- (52) この点は、同右拙著第一章を参照。
- (53) 『続再夢紀事』四(東京大学出版会、一九八八年)、五、二〇頁。
- (54) 同右、九二頁。
- (55) 註(41)に同じ。
- (56) 『幕末会津藩往復文書』下(会津若松市、二〇〇〇年)、一二二頁。
- (57) 『続再夢紀事』四、四七〜四八頁。
- (58) 「野村筆記」、二三八頁。
- (59) 以上同右、二四二頁。
- (60) 焼失した本丸御殿には、奥の御座之間の北側に能舞台があり、その一面に「楽屋」があったことが指図から分かるが、西丸仮御殿には見えない。
- (61) 「養賢閣」の「養賢」は『周易』の一節よりとったものと思われ、藩校名にも使用例があり、松平春嶽が堂号に「養賢堂」を用いたことが知られるが、関連は定かでない。
- (62) 現在、徳川記念財団を始め各所に「養賢閣図書記」の蔵書印が押された書籍の存在が報告されている(前掲『徳川家茂とその時代』、二四頁)。
- (63) 以上「野村筆記」、二四六頁。
- (64) 同右、二六〇頁。
- (65) 『続徳川実紀』四、八六八〜八七〇頁、「野村筆記」、二六六〜二六八頁。

- (66) 「野村筆記」、二七三～二七四頁。
- (67) 「昭徳院殿御在坂日次記」、慶応二年三月六日の条(『統徳川実紀』四、八八〇頁)。
- (68) 前田前掲書、第一章。
- (69) 石川謙『日本学校史の研究』(日本図書、一九七七年)、三二三～三四五頁。
- (70) 前田前掲書、二二八～二三〇、二五六～二五七頁。
- (71) 石川前掲書、三四五頁。
- (72) 塚本前掲書、一六八～一七一頁。
- (73) 大久保利謙「近世における歴史教育」(『大久保利謙歴史著作集4 明治維新と教育』吉川弘文館、一九八七年)、三八八～三八九頁。
- (74) 『統徳川実紀』四、七三九頁。
- (75) 同右、七三五、八七五頁。
- (76) 前田愛『成島柳北』(朝日新聞社、一九九〇年)、一二二～一二三頁。
- (77) 頼山陽著 頼成一・頼惟勤訳『日本外史』上(岩波文庫、一九七六年)の解説、一一～一二頁。
- (78) 三谷博『愛国・革命・民主』(筑摩選書、二〇一三年)、一六二頁。
- (79) 拙著『幕末の将軍』結語参照。
- (80) 註(73)に同じ。
- (81) 元田永孚「還暦之記」(元田竹彦他編『元田永孚文書』一、元田文書研究会、一九六九年)一三四頁。
- (82) 徳川義宣「將軍の書画」『別冊太陽 徳川十五代』(平凡社、一九七四年)一七四～一七五頁。
- (83) 以上については、拙稿「政治君主としての徳川家茂」、五八～五九頁。
- (84) 『南紀徳川史』三、一八九頁。